1

後から聞いた話である。

その日――。

山は雪景色で、それ程の上天気でもないと云うのに、外は何だか明るかったのだそうだ。

雪が僅かな日光を乱反射していたためか。

咆咆と山鳥が啼いた。

こんな冬場にも鳥と云うのは啼くものだろうか。今川雅澄は窓辺の中中具合のいい椅子に腰掛けて、そんなどうでもいいことを考えていた。

窓は掃き出しの硝子戸で、外は踊り場のようになっている。今川は起き抜けにそこに出て目覚ましに冷たい外気でも吸ってみようとも企んだのだが、あまりに寒いので止したのだった。それに、窓辺の冷え切った椅子に身を沈めただけで、目の方は充分に覚めてしまったのである。

今川は視線を遠方の山山から手前の木木へ移し、そして踊り場へと転じた。踊り場の板床や木の桟は長きに亙り風雪に曝されている模様で、実に白茶けていたのだが、手摺に積もった雪があまりに白いためか、その日は妙に黒黒と見えた。濡れていたのかもしれぬ。

鼻先が冷たくなって来る。今川はのっそりと立ち上がり、板間から座敷に戻った。

座敷も寒い。温い寝床は先程仲居がすっかり片付けてしまったから、部屋は妙にがらんとしている。座卓の上には茶が出ているが、それも冷めていることだろう。

肩を竦めて火鉢を覗くと、炭の方はかっかと頑張っている。

如何せんひとり部屋の割りにこの間は広いのだ。

効率が悪いので板間を仕切る障子も閉めた。

明るさが半端になった。

それでも朝だと判るから不思議なものだと、今川は思っている。

座卓に設らえてある座椅子に収まる。絹製の分厚い座布団が物凄く柔らかい。

「ああ、いい座椅子だ」

両手を伸ばして軽く振り回し、そんな独り言を云う。

当然答える者など誰もいない。

しかしそれも凡て了解済みの発声だから、思い切り巫山戯た声だった。

退屈だったのである。

——多分今日も、何もすることがない。

いや、もしかしたらとは思う。思うものの、それは昨日も思ったことであり、肩透かしを喰らうくらいなら最初から諦めていた方がいいと云うものである。諦めていて待ち人が訪れればそれに越したことはない。そう思った。

待ち惚けはこれで五日目になる。

幾ら老舗の宿とは云え、雪に閉ざされた山深い処であるから、外出も儘ならず、大体宿を出たところで見るべき名所旧跡など宿の近辺にはないのだ。この場合、実に見事にすることがない。湯に浸かり、料理を食い、晩酌をして寝るだけである。持て成しも一流だし地酒も中中のものだったが、御馳走と云ってもそう代わり映えがしないから三日を越すと飽きる。風呂は檜造りの大層立派なもので、そもそも何やら云う名泉なのだそうだが、湯治に来た訳でもないのに温泉にばかり入っている訳にも行かぬ。

今川は商売で来ているのだ。日が経てば経つ程、宿賃が嵩んで利幅が薄くなるのである。

——あれは、幾らくらいだろうか。

今川は床の間の掛物を見て胸算用をした。

黒黒とした力強い筆運びで、大きな丸がひとつ書いてあるだけである。墨跡か画賛か判断に苦しむ。

——禅画なのかな。

今川は書画の類は苦手だった。時代も画題も善く判らない。共箱でもあればいいのだが、見ただけでは何ひとつ価値が見切れない。表装の具合が判る程度である。中廻しが少少汚れているが、全体的には結構立派なものだろう。しかし、肝心の絵の価値が判らないのでは話にならぬ。今川は経師屋ではないのだから、表装の値踏みをしても始まらないのだ。

今川は頬杖をついて更に掛け軸を注視た。

考えごとの最中、今川は実に奇怪な表情になる。

それは——多分、傍からは忘我の状態にしか見えない。

それでなくとも今川と云う男は特徴的な顔をしているのだ。

一度会ったら絶対に忘れないと、知人の凡てが口を揃えて云う程のご面相である。

決して肥っている訳ではないのだが、一見ずんぐりとしていて、善く云えば貫禄がある。その貫禄を象徴しているのが立派な樽嗽鼻だ。その鼻の上に大きな団栗眼がついており、その上には蚰蜒の如き太い眉毛がある。少しばかりしまりのない唇は厚く、それを取り囲む髭もまた濃い。その代わり顎は殆どなく、唇の下方は宥らかな曲線を描き頸へと続いている。顔の部品がどれも立派過ぎて、実に濃い顔に仕上がっている訳である。不惑を過ぎればさぞかし重厚な、味のある大商人と云った容貌になるのだろうが、今のところ若さがそれを退けている。

熟考中は、この面相が一層弛緩するのだ。

十分はそうしていた。

だが結局値段は爽然解らなかった。

今川は続いて床の間の壺だの、目の前の座卓だのも値踏みしてみたが、悉く確乎りした判断が下せずに、結果その無為な遊びにも飽いて部屋を出た。

廊下は艶艶に磨き込まれており、窓からは前庭が望める。宿全体の構造は今ひとつ摑み切っていなかったが、階下の大広間に面した風雅な中庭とは別物である。様子がまるで違う。前庭は到着時に通過した筈だが、大きな埖箱しか印象に残っていない。

ふと振り返る。突き当たり、廊下の角に飾ってある壺が目につく。実に古そうで、かつ高価そうな品だ。それは遠目にも判る。

――信楽、いや常滑だなあ。

焼き物は書画に比べればまだ得手の方だった。ただ値がつけられぬ。古そう、高そうと云うだけなら素人にだって云えることである。幾ら良さが判っても、それを金に換算できなければ意味がないのだ。

今川雅澄は、未だ自信を持った値踏みのできぬ、駆け出しの古物商なのだった。

――まあ、いい品なんだろう。

いずれにしてもこの宿――仙石楼の中にあるものは凡て、かなり高価な骨董品なのだと、今川は判らぬなりにそう踏んでいるのだ。大体建物自体が骨董染みているのだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。